

鶴見区の国際交流

韓国・朝鮮の文化に親しむ集い

長塚 久 柏田龍夫 鈴木一博 真野保久

一 はじめに

鶴見区という地域的・歴史的特性にふさわしい国際交流とはどのようなものであろうか。

国際化の波が押し寄せ、現代社会が国家の枠を越え、国家間相互の協調の中で社会・経済の諸関係が築かれ、個人人の生活の中にも色濃く滲み出ている今日、地域社会の中から国際友好と相互理解の機運が盛り上ってくる現象は時代の趨勢であろう。しかもそのモチーフを「文化」に求めることは国際交流の絆として、また行政区という現実的制度下での糧としてふさわしいものと思われる。何故なら文化には政治やイデオロギーを止揚し

た、その国の社会を構成する人々が生活の中で創出し、かつ享受する生の姿が内在するからである。

このような視座に立ちながら鶴見区を振り返ってみるとき、一つの地域的特性に気がつく。それは区内に韓国・朝鮮人の多い事実である。後に詳しく述べることとなるが、これには一つの歴史的下地が過去に存在した。

戦後四〇年新たな国際的状況が現出している今日、当区はこの事実関係をとらえて、文化を通じた韓国・朝鮮の理解を深める試みをもつことになった。この試みはいうまでもなく当区にとって最初の試みであり、ゼロからの出発であった。不十分な内容ではあったが、この取組み

の一部始終が後に続くことになる。

二 講座取り組みの経過

①区内の韓国・朝鮮人の状況

区内の外国人登録状況は昭和六十一年一月三十一日現在二、六八七人を数え、その内訳はアジア系が九五%を占め二、五五五人、欧米その他が5%の一、三二人となっている。このうち韓国・朝鮮人は全体の八一%を占める二、一七〇人とされており、市内一四区中最大の人口を抱えているがこれには一つの訳がある。そのため唐突ではあるがひとつ昭和十七年四月十九日の朝日新聞を引用してみた。

- 一 はじめに
- 二 講座取り組みの経過
- 三 講座の内容
- 四 参加者の構成と反応
- 五 今後の取り組みと将来への課題
- 六 おわりに

「鶴見間の工場街見事防衛の大任果す。鶴見の工場街は敵機の爆撃、地上掃射と闘い火災一つ起さず重要工業地帯防衛の大任を立派に果たした。……工場特設防護団員の活躍は手際よくこれを処置し、我々に鉄桶の備えありと誇示した。」

この記述のとおり、鶴見は戦前から日本の重化学工業地帯として発展しており、戦時中は軍需工業の基地と化していた。その頃我が国の植民地化政策により、朝鮮半島の労働者の強制移入が行われ、工場労働者として工場付近のバラックに住まわされていたという歴史的状況が存在していたのである。彼らは終戦と同時に不安定な身分となり、昭和二十七年四月サンフランシスコ平和条約の締結に伴

戦後の新生国家下に制定された外国人登録法の施行により正式な形で外国人の道へと向かうこととなった。このような急激に生じた社会的変動による他律的な支配関係の中に彼らは位置づけられながら、その後の時間を刻むこととなった。

鶴見区に韓国・朝鮮人が多数居住する一つの大きな背景としてこのような歴史的下地が存在するのである。

②—方針決定と準備

今回の取り組みは昭和六十年年度予算に関する区内討議の中での一つの提案が身と結ぶという道筋をたどった。

各種の地域振興や社会教育施策は主に区活動費を予算とする区自主事業として取り組まれているが、この検討の中で「これまで取り組まれていない区のソフト問題は何か」という提議の下に討議が開始され、様々な議論が交わされたが、その中の一提案として区内の韓国・朝鮮人問題への対応があったのである。区人口の約1%の比重を占める事実と、国際化という社会的背景と対座しながら、これまで取り組みが遅れていた分野としてこのテーマは浮上してきた。

戦前戦後を通じた複雑な歴史的過程の中で築かれた韓国・朝鮮人問題のいわば掘れ込んだ構造が茫漠とした形で残存し続ける今日、この問題への取り組みに慎

重論を期す空気もやであった。しかし国際交流の気運の盛り上りと、区民としての外国人、特に区内外国人の大勢を占める韓国・朝鮮人問題への正面からの取り組みには波及する多大な効果を見込め、かつ交流と相互理解を基調とする国際友好の理念に一致し、しかも行政区がこれを自主的に展開することに大きな意義を見出すことになったのである。

この背景には、「文化を媒体とする民族間の相互理解をめざす取り組みは行政区の施策にふさわしい」という森川鶴見区長以下区首脳部の判断があったことは付言しなければならぬ。

ここに方針決定され、準備段階へと移行することになるが、何といても前例がほとんどない。まず所管の問題が浮上した。いくつもの紆余曲折を経て総務課庶務係となったが、これはある意味で当然の帰結であったのかもしれない。

予算としては主に区活動費(講師謝礼等)二五四、〇〇〇円を充当した。

文化に金はかからないといわれるが、この講座もその一例であるのかもしれない。文化講座と「人々の集い」が醸し出す価値は計りようもないと思われる。

講習内容と講師の選定については、事務局(総括責任者)総務課長、事務主任(庶務係長、担当)鈴木吏員、協力(真野吏員)が一丸となり何人かの方々の助

言を得て決定した。また文化といっても広く、初めての試みであることを考慮し、できるだけ基礎的な部分から入ることになった。

三——講座の内容

今回の「集い」に参加した人たちの中には、少なからぬ在日韓国・朝鮮人たちがいた。その中には、日本で生れ育った二世、三世もおり、彼らにとっても母国の美術・文化に対し体系的に出会う機会はその多くはないはずである。そういった意味では、この講座で彼らは自己の民族的アイデンティティに触れたはずである。一方、日本人にとっては戦前からの歪められた朝鮮認識を改める機会になったのではないかと思う。

「集い」の進め方は、テーマ毎に週一回講義形式をとり、各講師に一時間余の講義をしていただいた後、小一時間ほど講義内容を裏付けるビデオやスライドの上映してもらった。

各テーマや内容は、おおよそ次のようなものである。

- ①「民俗芸能について」(十月二十三日 水) 金阿基(キムヤンギ) 中央大学(韓国)客員教授

わが民族は、「音さえ鳴れば巫女が踊り出す」という諺があるほど音(歌)と

踊りが好きな民族として知られています。それほど音(歌)と踊りが一体化して日常生活のなかで自然と身につけているのです。

民謡は全土にたくさんあって、そのほとんどは三拍子から成り立っており、この三拍子が最も舞踊に適していることから優れた舞踊を生み出したといえます。

しかし、その三拍子が平板なものではありません。「アリラン」を例にとってみると各地方毎にかなり歌い方に差があります。というのは、同じ三拍子でも自由に変奏的な抑揚とメリハリがつけられて歌われるからなのです。こうした自由なリズムの取り方、ダイナミズムは実はわが民族の基層文化のリズムといたっていいものです。民俗芸能の代表的なものとしてあげられる「農楽」のダイナミックなリズムとそれによって大地の上を動きまわる踊り、パンソリにおける唄い手と鼓手のかけあいのリズムの変調、転調みなりかりです。

庶民の生活感情をユーモアを交え、諷刺をきかせて演じる仮面劇も注目をあびており、ここにも軽妙な庶民感覚が顔をのぞかせています。

- ②「古代の美術について」(十月三十日 水) 村野浩東海大教授

文化的にはともに儒教文化圏のなかにあって、双子の兄弟といつてよいような

朝鮮と日本の間柄であったが、しかしよくその中身をみてみると、その環境、歴史経過によって異なった個性を持っていることがわかる。

朝鮮文化の基層には、古代から大きく二つの流れが伏流している。ひとつは儒教伝来以前の東北アジア（北方民族）的感覚なるもの、例えば新石器時代の朝鮮の櫛目紋土器にみられる実用的で簡素、そして開放的な造形感覚である。もうひとつは中国の漢の時代に移植された儒教文化の流れである。我々日本人は、朝鮮が単に日本に儒教文化をもたらしてくれた存在とのみ見ながちだが、朝鮮は東北アジア的なものと儒教文化の移植のなかで、独自のものを造り出していたのである。特に朝鮮の美の本領を發揮しているのは、彫刻や絵画においてより工芸面においてであった。

③「韓国における伝統文化・社会と現代」（十一月六日 水） 伊藤亜人東京大学助教授

韓国社会は六〇年代以降、急激な変貌を遂げている。しかし、韓国社会を成り立たせている原理そのものが大きく崩れているわけではない。

朝鮮では移植された儒教（朱子学）が理論面より純化され、日常生活においても生活規範化している。例えば家屋の配置ひとつとっても「長幼有序」、「男

女有别」の原理が貫かれ、男性はまず女性部屋に立ち入れず、女性はそこで固有の空間を持っている。

また、韓国社会は、「祖先」を媒介にした血縁関係が社会の成り立ちの上で大きな位置を占める父系社会であり、そのきずなを示すものに一族の盛大な祖先崇拜の祭「祭祀」（チエサ）や一族の来歴を数百年もさかのぼれる「族譜」などがある。

しかし、こうした儒教原理がより徹底したのは、両班（ヤンバン）といわれる上層階級であり、地域的には半島の中部地方内陸部が中心であって北部や島嶼地

帯ではそれほど徹底しなかったようである。

一方、儒教原理と並立共存してきたものに土着の巫俗信仰がある。儒教が生活習俗的で宗教的要素を少なくしているのに対し、この巫俗は民間習俗と習合しながら強い信仰性を維持しており、病氣療養、悪運追い出し、死霊送りなどシャーマニズム的な巫歌や巫踊をとめないながら庶民の間で広く行われてきた。だがそれも韓国の高度成長による都市化やキリスト教徒の急増などによって衰退の方向にはあるが、しかしまだ根強い勢力をもっている。

四 参加者の構成と反応

この行事は、主に一般主婦層など韓国・朝鮮に比較的関心の薄い区民の参加を前提として企画されたが、参加者の募集メディアもこれを考慮して広く区民にアピールするものでなければならなかった。一般的に区役所の行事P・R、に用いられるのは、「広報よこはまつるみ区版」である。今回は、これと町内会を通してのB5判チラシ回覧を併用した。区役所サイドとしては、このような手段を用いたが、これとは別に講師のひとりである金岡基氏が「読売新聞」と「統一日報」に働きかけ、この行事を紹介してく



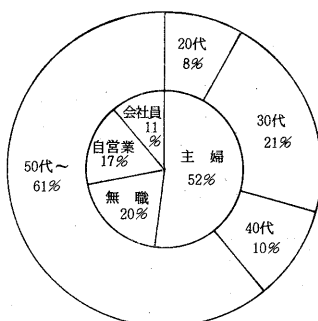
写真一 1 講義に聴き入る参加者

れた。こうして区内でのP・Rを広報とチラシ、区外でのP・Rを一般新聞によって行うこととなり、その結果、募集定員八〇人を超す応募があった。参加者の内訳は、男性二六人、女性五四人、区内五一一人、区外二九人である。

さて、区役所では今後の事業展開の参考とするため、講座の第三目に参加者に対するアンケートを実施したが、そのうちいくつかの結果を次に示す。

この行事は、前述のとおり、主に一般主婦層にターゲットを置いたため、平日午前一〇時開始としたが、はたして狙いどおりの参加者構成となっている（図一）。開始時刻を夕刻に設定すれば、グ

図一 参加者の年齢と職業



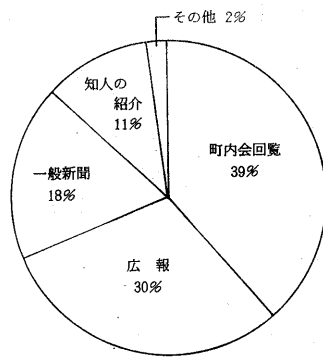
ラフにおける三〇代と五〇代の比率、あるいは職種比率は大きく変化することが予想できる。

参加者がこの行事を知り得た情報源は、図一2の示すとおり多岐にわたるが、

区外参加者二十九人は、一般新聞やくちコミによってこの行事を知り得たわけであり、回覧や広報だけが区の行事をP・Rする手段なのではないことを感じた。

また、参加の動機については、全員がテーマに興味を持ったことをあげている

図一 2 「集い」を知ったきっかけ



が、参加者には、在日韓国・朝鮮人も多く、祖国の文化に触れてみたいという参加者もいれば、諸外国の一つとして、隣国についての知識を深めたいという参加者もいた模様である。

アンケートは、最後に参加者が韓国・朝鮮に関する行事にどのようなものを見てほしいのかを質問しており、代表的回答を列挙したい。

- ・ 講義のテーマ
- ・ 古代における日本と韓国の関係
- ・ 風俗・習慣・言葉
- ・ 日本との比較文化論
- ・ 現代の政治・経済

・ 食生活

・ 講義以外に希望する催し

・ パンソリ・仮面劇の上演

・ 写真展

・ 美術・工芸の見学会

・ 在日韓国・朝鮮人と日本人との交流の場

これらのうち、最後の回答にみられるような交流の場を設け、ディスカッションをしたり、もつとナマの文化に触れることによって、相互理解をしたいといった意見が印象に残っている。

○今後の課題

① 区民の理解度と評価

今回の参加者は、五〇代以上の主婦、もしくは退職し、老後生活を送っている区民がその大半を占めているが、参加者を三つのカテゴリーに分類することができ。

ひとつは、昨今のマスコミ報道において現代韓国の産業構造の変化、国民生活の様子が伝えられ、これをきっかけに隣国にも欧米なみに目を向けようとする市民である。もうひとつは、韓国・朝鮮文化、東洋美術にかなり精通している市民であり、その知識をさらに深めることを目的としている。さらにもうひとつは、在日韓国・朝鮮人であり、彼らは文化を通して祖国の「心」に触れたいと思っているのかもしれない。

三人の講師は、日常このような分野において学生とディスカッションする機会があっても予備知識の少ない市民に概論的講義をする機会はないという。この講義の内容もVTRもしくはスライド上映を骨格とし、それに解説を加え肉付けするという手法をとり、誰にでも理解し得るレベルにとどめている。よって、前述の第一のカテゴリーに属する市民にとっては容易に理解でき、韓国・朝鮮の文化にさらにひかれる講義であったと思われる。一方、第二のカテゴリーに属する市民にとっては、質的・量的には物足りないかもしれないが、数少ないこのようなテーマの講義のひとつとして研究の助となったのではないだろうか。質疑応答においても講義やスライドの内容と自分の知識との関連性について多くの質問が寄せられた。また、第三のカテゴリーに属する市民は、おそらく自分の祖国の文化を肌で感じたことがなく、ほんの微少であるかもしれないが、民族的アイデンティティに触れ得たはずである。

のような形であれ、韓国・朝鮮に関する事業は今後も展開されるであろう。その時、次節であげるような今回の反省点をどのように活かし、踏み台にしてゆくかが、本事業全体に対する評価につながるものと考ええる。

② 今回の経験から

・ テーマと形式

「民族芸能」「古代美術」「伝統文化と社会」という今回のテーマは「仮面劇」「民謡」「石仏」「血縁」「儒教」といったテーマに細分化することができ、それらについて探求することも可能である。また、「古代における日本と朝鮮半島のつながり」「現代風俗」「生活様式」といった他のテーマに波及させてゆくことも可能である。前章におけるアンケート結果は、参加者の様々な要求を示しているが、テーマを絞れば講義形式では満足できないものもある。例えば仮面劇の上演、楽器演奏等のパフォーマンスあるいはディスカッション等である。今回の事業は、我々の持つ数少ない情報・資料をもとに進められたため、また、応募者数の予測ができなかったため当区のこれまでのコミュニケーション・カレッジ等の経験に頼らざるを得ず、事業形態としては独自のものはなかった。その意味で、今後、他都市あるいは民間団体が進める事業の動向にも広く目を向け吸収していか

ねばならない。市民が我々に何を求めるのか、そして我々が現状をどのように変えたいのか、その接点が今後の事業展開という回答を導き出すのである。

・開催時間帯と参加者層

今回は、より多くの市民が参加できるように午前10時(他事業の経験上)開始としたが、サラリーマンや学生にとつては夜間の方が好都合である。予算との兼合いもあるが、より多くの年齢層、職業層にこの問題に対する認識を求めるとすれば、昼夜二部制あるいは休日開催も考えなければならぬ。

五 今後の取り組みと将来への課題

国際交流の舞台に行政区が乗り出す例はあまり見かけられない。それはこれまで行政区が自治制度下で築かれた国一県一市一区といった分相応の役割分担と機能を意識しすぎたように思われてならない。勿論定められた枠の中で活動すべきことは当然である。しかしこれは区にとつてそれ程の支障をもたらすものではない。何故なら自らの機能の中で国際交流の舞台に立てばよいからである。

国際交流の舞台は広く多様であり、とすれば政治、外交分野にまで発展する可能性を含むものではあるが、ふとこれを振り返ってみると区の活動の場がきち

んと設けられているように思われる。

当区の取り組みの第一歩は韓国・朝鮮の文化講座に始まったが、このテーマは深海の深さを持つ領域である。今回の内容が韓国・朝鮮の民族芸能や美術史を通じた同国の歴史と生活風習の理解に重点が置かれ、一定の成果を得たところであるが、今後はこの取組みを区民にとつてより身近な交流へと接近させて行かねばならない。その為には例えば各種の芸能観賞、料理教室など触れ合いの場を設けながら、この方向を講座方式から民族間相互の対話方式へと向けてゆく必要がある。

ともあれ、文化を通じた国際交流の舞台は行政区が活躍する有力な領域の一つであることに疑いはないだろう。

一方、将来の国際交流を念頭に、広く現下の国内を見渡すと、まだまだ交流という美名の下に本来の交流とは懸け隔った現実が目につく機会に出会う。

本来、国際交流の基本は各々の民族が持つ風俗、宗教、文化、生活様式といった民族性を対等な立場で尊重しながら相互に理解し合うことにある。この観点に立ち将来への課題を思い浮かべると、とすれば排他的な島国民族になりがちな我々日本人が新たな国際交流感覚を自らの中に構築するという課題が投げかけられているように思われてならない。

当区の課題も同様であろう。区民として多数居住する外国人との友好関係を築きあげる道は、結局お互いの民族性を尊重し合うことにある。その意味で地域とは外国人との直接交流の舞台として最良の場であるのかもしれない。

六 おわりに

この集いは所詮一〇〇人程度の人数であり三回の催しに過ぎない。如何に参加者全員の熱意に溢れた集いであつたとしてもこの催しの価値を直接の参加者についてのみ計るのならその高はしれたものなかもしれない。しかし敢えてその価値を問うならば、何処に見出すことができるのだろうか。

通信交通手段の発達による地球の狭隘化は国際交流の可能性を飛躍的に拡大した。我が国もこれに違わず脱亜入欧、或いは経済合理主義的観点から広い国際関係を築きあげてきた。しかし国家として存在する以上隣国との関係が等閑視されてよいということにはならない。まして我が国と韓国・朝鮮との関係は歴史的にも甚だ深いものである。また在留する外国人としての数の上からも、在留経緯の特殊性からしても、これを重視することは至極当然のように思われる。

一方、韓国・朝鮮の我が国に対する関

心度は常に高いと聞き及ぶが、それに對する我々日本人の関心はどうであろうか。それはとすれば視野の外に置かれがちな「近くて遠い見えにくい国」として捉えがちではないだろうか。

この理由は様々考えられるが「見たくないから見えにくくなった」といえないだろうか。

地域社会の中にあつても外国人との良好な関係での共存条件は何よりも先ず相互理解が必要であろう。このためには人間性の基盤に立ちながら相手をよく知り、また自分の考えも正しいと思えば主張する相互の差異の認め合いと尊重の中に真の理解を熟成する必要がある。

国際化の渦中にあつて単一民族という生来の宿命を抱えている我々ではあるが、今や井の中の蛙的な処世法や既定觀念のみでの相手の見方は世界潮流を泳ぎきる力を与えてくれないだろう。

この度の当区の取り組みの力点は、一つの積極的姿勢を示すことであつた。旧習からの脱皮や新しい国際関係の樹立はよく語られる。しかし我々は何の形にしろ実際の活動を為すことによつて、小さな灯のともる窓口を見つけ出したかったのである。

△長塚 鶴見区主幹・総務課長(兼務) / 柏田 総務課庶務係長 / 鈴木 同課同係 / 眞野 保険年金課